



恵慶百首 序文試注

著者	福田 智子, 今井 明, 黒木 香, 田坂 憲二, 竹田 正幸, 南里 一郎, 西原 一江
雑誌名	同志社国文学
号	65
ページ	54-64
発行年	2006-12
権利	同志社大学国文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000005378

〈惠慶百首〉序文試注

福田智子・今井明・黒木香・田坂憲二・
竹田正幸・南里一郎・西原一江

凡例

- 一、本文 底本は、冷泉家時雨亭叢書第六十七卷『資経本私家集三』(二〇〇三年十二月刊)所収、資経本惠慶集とする。漢字仮名の区別、仮名遣い、おとり字も底本のままとし、濁点も付さない。
- 二、校異 『惠慶集校本と研究』(熊本守雄氏、桜楓社、昭和五三年)に収められた以下の影印本を用い、語の異なりのほか、表記の違いも示す。

○書陵部一五〇・五五八本

略称(書古)

○越桐喜代子氏蔵(前田家旧蔵)本 略称(前)

- 三、語釈 見出し語は、底本の表記のまま掲げる。ただし、歴史的仮名遣いに改めたり、濁点を付したり、誤字脱字を校訂したりする必要のある場合には、見出し語の次に()を付けて示す。

四、考察 考察中での和歌の引用形式は、原則として、「和歌本

文」(歌集名・部立・歌番号・詠者名・詞書)とする。なお、『万葉集』の歌番号は、旧番号・新番号の順に並記する。

五、和歌の引用は、特に断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。

『惠慶集』については、主として底本の資経本を用い、適宜、他本を参看する。その際、引用本文の仮名遣いは原本のままとするが、踊り字を解消し、濁点を付す。

注釈

【本文】

これは、よの中に曾祢の好忠といふ人のよめるも、ちの哥のかへし

我すへらきや、天徳のすゑのころをい、あさな好忠曾丹といふ人、

も、ちの哥をさへにいたし、いはし水のいはまほしきこと、も、そのありさまは、春の花のおり／＼につけ、秋のもみちの色／＼にふれ、うくひすき、すすくしかたきあした、なくしかあはれなるゆふくれ、ほど、きすこゑするなつ^マのよ、まさきのかつら色つきわたる冬のはしめ、かせのをとふきあけのはまの、月のひかりあかしのうらなる夜、物のあはれにおほゆれ^マ、いひあつめたること、も、春の花秋のもみちよりも、よの中にちりはてにけり、み、なしの山のき、しらぬみ、にも、身なしこをかあはれなんおほえける

あはれ、よの中は、さ、かにのいやしきたうときも、はるのたのすくもすかぬも、いひせめては、おなしみやまのくもかすみとのほりぬるをやといへる事ともを、又あるふんやわらはあさな聖寂といふ人、おなしも、ちの哥をおなし心によみつ、け、おほみかきのゑししつのをたまきまでなん、あはれにおもはせたりける

これを又ある山ふしけの衣に身をやつし、松のもとにおいをおくる心にも、さすかに物、あはれわすれかたく、よの中のはかなきありさまも、これにつけていはまほしければ、むかし、うち山の喜撰、かたの、沙弥といふ山ふし世をすてなから、かゝるすちの事なくはこそあらめとて、ことこのむにはあらねと、みやま木こつたふさるに、いひあつめたる事とも、にのまひになんなりにける、をかしきことにはあらねと、みん人わらひもしてんかし

【異同】○これはよの中に曾祢の好忠といふ人のよめるも、ちの

哥のかへし／＼ナシ（書古）も、ちのうたのたいこれは世中に曾根のよした、といふ人のよめるうたの返し（前）○我わか（前）

○天徳のすゑのころをいみつのこほろひ（前）○あさな好忠曾丹—あはなそた^マ・こ（「は」見セ消チ）（前）○も、ちの哥をさへ

にいたし—も、ちとりも、ちのうたをさくりいたし（前）○いはし水—いはまのし水（前）○いはまほしきこと、も—いはまほし

きかきりいひいたしたる事とも（「いたし」見セ消チ）（前）○ありさまは—ありさま（前）○春の花のおり／＼につけ—春のはな

のおり／＼につけ（書古）春の花おり／＼につけて（「て」見セ消チ）（前）○秋のもみちの色／＼にふれ—秋のもみち色／＼になむ

（前）○き、すすくしかたき—き、すすくししかたき（前）○ほと、きすこゑするなつ^マのよ—ほど、きすねたきこゑする夏の夜（前）

○色つきわたる—いろつきわたる（前）○かせのをとふきあけのはまの—風のをとふきあけのはま（前）○あかしのうらなる夜物

のあはれに—あかしのはま^{うらなる}・よものあはれ／＼に（前）○おほゆれ^マ—おほゆれは（書古）おもほゆれは（前）○いひあつめた

ること、も—いひあつめたること、も、（前）○春の花秋のもみちよりも—春のはな秋のもみちよりも（書古）はるのはな秋のもみ

ちよりもけに（前）○み、なしの山—み、なし山（前）○み、に

も―身にも(前) ○身なしこをか―みなしこをか(前) ○あはれ
なんおほえける―あはれになむおもほえける(前) ○よの中は―
世中は(前) ○いやしきたうときも―いやしきもたうときも(前)
○ふんやわらはあさな聖寂といふ人―ふやわらはあさな―
いふ人(前) ○おなしも、ちの哥―おなしも、ちのうた(前) ○
よみつ、け―よみ(前) ○おほみかきのゑししつのをたまきまで
なん―おほみかきもりのゑし、つのをたまきまでになむ(前) ○
おもはせたりける―思はせたりける(前) ○こけの衣―こ・のこ
ろも(前) ○松のもと―まつのもと(書古)(前) ○おいをおく
る―おいを、くる(前) ○物、あはれ―物のあはれ(前) ○よの
中―世中の(前) ○むかし―むかしは(前) ○喜撰かたの、沙
弥といふ山ふし―きせんきみかたのさみといふ山ふしも(前)
○世を―よを(書古) ○ことこのむには―ことこのむとには(前)
○みやま木―みやきに(前) ○さるに、―さるに(前) ○事とも
―こととも(前) ○にのまひになん―にのまひになむ(前) ○を
かしきことには―おかしことには(前) ○みん人―みむ人(前) ○
してんかし―しなむかし(前)

【通釈】

これは、世間で曾祢好忠という人が詠んだ百首の歌に対する返歌である。

我が帝、村上天皇の御治世である天徳年間の末の頃、通祢好忠曾丹という人が、百首までもの歌を作り上げ、言葉に表現したいことの数々の、その景色は、春の花の咲いては散る折々につけて、あるいは、秋の紅葉が色とりどりであるのに接して、鶯の声を聞き過ごしてはいられない朝、鳴く鹿の声がしみじみと趣深い夕暮れ、時鳥の声がする夏の夜、真折の葛が一面に色づく冬の初め、風が音を立てて吹き上げる「吹上の浜」の、月の光が「明石の浦」の名のように明るい夜、それらの景物がしみじみと趣深く思われるので、さまざまに表現した歌の数々は、春の花や秋の紅葉が散るよりも早く、世間に散り果て流布してしまった。「耳梨(耳無し)の山」の名のように、耳が無く、その歌の意味を聞いて理解することのない人にも、「みなしこ岡」の名のように、孤児のしみじみとした情感が感じられた。

ああ、世の中は、身分が卑しい者も尊い者も、また、風流を解する者も解さない者も、厳しく問いただせば、同じ身の上であり、御山の雲や霞となって天にのぼってしまふ「死んで火葬の煙となる」のだ、といったことなどを、また、ある大学寮の学生、通祢聖寂という人が、好忠と同じ百首の歌を同じ趣向で詠み続け、大御垣の衛士や賤の男にいたるまで、しみじみと趣深く思わせた。

これをまた、ある山伏(惠慶)が、苔の衣に姿を変え、松の木の

下で老後の暮らしを送る心にも、さすがに景物のしみじみとした趣味深さが忘れられず、世の中の無常である様子も、歌に託して表現したので、昔、宇治山の喜撰や、三方の沙弥という山伏が、世を捨てたにもかかわらず、このような歌を詠むことがなくていられようか、ということ、風流事を好んだというたいそうなことではないけれど、深山の木の枝を伝う猿に似て（人目につかないようにして、喜撰や三方の沙弥のように）、さまざまに表現した歌の数々が、（先行する百首歌の）真似になってしまった。「をかしきこと（風流なこと）」ではないけれど、これを見る人は、「をかしきこと（滑稽なこと）」だと、きつと笑いもするだろうよ。

【語釈】○曾称の好忠 延長元（九二二）年頃生ゝ長保五（一〇〇三）年頃没か。『中古歌仙三十六人伝』『袋草紙』などによれば、丹後掾として、かなり長い間六位にとどまっていたらしい。それで、世に「曾丹後」「曾丹」とも呼ばれた。永観元（九八五）年二月十三日、円融院の子の日の御遊に、召されもしないのに出掛けていったという話（『今昔物語集』巻二十八など）は有名である。『拾遺集』以下の勅撰集に九三首入集。○も、ちの哥（ももちの哥）「ももち」は百。「ち」は「二つ」などの「つ」と同源である。「ももちの哥」で百首歌をいう。○我すへらき（我すべらぎ）「すべらぎ」は天皇。「我すべらき」で「今上」の意を込める。「かかるにいます

べらぎのあめのしたしろしめすことよつの時このかへりになむなりぬる」（古今集・序）。「中宮ながづきのとをかやうか、あからまにわたらせたまふゆふ辺に、わがすべらぎもみゆきせさせたまへる、」（万寿元年高陽院行幸和歌・序文）。○天徳のすゑのころをい「天徳」は、村上天皇朝の年号。九五七年一〇月二七日から九六一年二月一六日まで。「ころをい」は、時分、ちようどそのころ。前田家旧蔵本では「みつのこほろひ」。○あさな（あざな）実名のほかに通用している名。通称。○好忠曾丹 「好忠」と「曾丹」とが重なるのは如何。「好忠」は、行間書き入れが、本文化したものが。○も、ちの哥をさへにいたし（ももちの哥をさへにいだし）「さへに」は、添加の副助詞「さへ」に助詞「に」が付いたもの。……までも。前田家旧蔵では、「も、ちとりも、ちのうたをさくりいたし」と探題であったことを記す。○いはし水のいはまほしき 「いはし水の」は「いは」の同音反復で「いはまほしき」を導く序詞。「相坂の関にながるいはし水いはで心に思ひこそすれ」（古今集・恋一・五〇三七・読人しらず・題しらず）。なお、前田家旧蔵本「いはまのし水」では、同音反復の序詞として用いられた例が見当たらない。○秋のもみちの色く（秋のもみちの色々）秋になり、草木の葉が色とりどりに紅葉するさまをいう。「あきのつゆいろいろごとにおけばこそ山のこのはちくさなるらめ」（古今集・秋下・

二五九・よみ人しらず・題しらず)。○うくひすき、すすくしかたきあした(うくひすきすすくしがたきあした) 底本文「うくひすき、すすくしかたきあした」を尊重すれば、「鶯・雉子、過ぐし難き朝」と解釈し得る。だが、本序文では以下、「鹿」「時鳥」「真拆の葛」が、それぞれ秋・夏・冬の景物としてひとつずつ充てられている。そこで、「き、すすくしかたき」の「す」を衍字と見て、春の景物として「鶯」のみを認めることにした。鶯の声を聞き過ごしてはいられない朝。「うぐひす(鶯)」は、待望の春の訪れを告げる鳥。「あらたまの年立帰る朝よりまたる物はうぐひすのこゑ」(拾遺集・春・五・素性法師・延喜御時月次御屏風に)。○なくしかあはれなるゆふくれ(なくしかあはれなるゆふぐれ) 秋になると、牡鹿は牝鹿を慕って鳴く。それがとりわけしみじみと聞こえるのが夕暮れ時である。「おく山に紅葉あみわけなく鹿のこゑきく時ぞ秋は悲しき」(古今集・秋上・二一五・よみ人しらず・これさだのみの家の歌合のうた)。○ほととぎすこゑするなつのよ(ほととぎすこゑするなつのよ) 「ほととぎす(郭公・時鳥)」は、夏鳥で、夜間にも鳴く。「夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしののめ」(古今集・夏・一五六・きのつらゆき・寛平御時きさの宮の歌合のうた)。○まさきのかつら色つきわたる冬のはしめ(まさきのかつら色つきわたる冬のはじめ) 「まさき(真拆・柗木)

のかづら(葛)」は、定家葛の古名。また、蔓柗(つるまさき)の古名ともいう。古代は神事に用いられた。「み山にはあられふるらしとやまなるまさきのかづらいろづきにけり」(古今集・神あそびのうた・一〇七七・とりものうた)。○かせのをとふきあげのほま(かせのをとふきあげのほま) 「ふきあげ(吹上)のほま(浜)」は紀伊国の歌枕。その名にちなんで、「波」や「風」とともに「吹き上げ」の意を掛けて用いられる。「秋風の吹きあげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか」(古今集・秋下・二七二・すがはらの朝臣・おなじ(寛平) 御時せられけるきくあはせに、すはまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりけるうた、ふきあげのほまのかたにきくうゑたりけるによめる)。なお、『公任集』四四七番詞書に、「吹上の浜にいたりぬ、風のいさごを吹きあぐればかすみのたなびくやうなり、げに名にたがはぬ所なりけり……」とある。○月のひかりあかしのうらなる夜「あかし(明石)のうら(浦)」は播磨国の歌枕。「月」とともに「明かし」との掛詞で用いられる。「秋の夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり」(古今集・秋上・一九五・在原元方・月をよめる)。○いひあつめる「いひあつむ」は、ある事柄についてさまざまに言う、いろいろのことを言う、の意。『惠慶集』一六五番以下の序文「……あはれわれらわたつうみのふかき心もしらで、山かはあさましくいひ

あつめたることどもを、よの中にながさんこそ、はづかしのもりの
はづかしけれ」や、『安法集』序文「……あはれなる折ふしに、人
しれずいひあつめたる言の葉、さまざまにつけつつおほかれど、た
だ一二ぞおぼゆるをかきあつめたるなり」、『輔親集』序文「……霞
の夕をみて友をたづね、興にのりて酔によるついでにいひあつめた
ること葉なれば、はかばかしくもおもほえず……」など、私家集の
序文にまみ見受けられる。○み、なしの山のき、しらぬみ、にも
（みみなしの山のきしらぬみみにも）「みみなし（耳梨）の山」
は大和国の歌枕。大和三山のひとつ。「耳無し」との掛詞で用いら
れ、「耳無し」ゆえに「聞き知らぬ」と続く。「みみなしの山のくち
なしてしかな思ひの色のしたぞめにせむ」（古今集・雑体・一〇
二六・よみ人しらず・誹諧歌 題しらず）、「めなし川みみなしやま
のみみきかずありせば人をうらみざらまし」（古今六帖・第三・一
五六七・かは）、「山びこはこたふるものをいかなればみみなし山と
いひはじめけん」（忠岑集・一四一・これひら）、「やまびこぞ人ま
ねもするみみなしの山はなにをかききもいるべき」（忠岑集・一四
二・ただみね）など、恵慶以前にも用例が散見する。○身なしこを
かのあはれ（身なしこをかのあはれ）「身なしこをか」の他例は見
出せず、所在も未詳。「身なしこ」から「あはれ」を導くため、修
辭的に作られた語であろう。先の（みみなし）山との対比で

「（身なしこ）をか」としたか。また、狐兎が捨てられる場所のイメ
ージが、「丘」にはあつたか。なお、「身なしこ」の例ならば、「ゆ
ふかげのきみのためはしみなしこにわれらをなすなちよまつつ
ゑ」（古今六帖・第四・二三一七・つゑ）、「みなし子となになげき
けむ世中にかかるみのりのありけるものを」（新勅撰集・釈教・五
九〇・皇太后宮大夫俊成・待賢門院中納言、人人すすめて、法華經
廿八品の歌よませ侍りけるに、譬喩品、其中衆生悉是吾子の心をよ
める）がある。また、「みなし草」の例が、恵慶と交友の認めら
れる順の歌に見える。「あらたまの 年のはたちに たらざりし
時はの山の 山さむみ 風もさはらぬ ふち衣 ふたたびたちし
あさざりに 心もそらに まどひそめ みなし草に なりしより
物思ふことの 葉をしげみ ……」（拾遺集・雑下・五七一・源し
たがふ・身のしづみけることをなげきて、勘解由判官にて）。○さ
さかにのいやしきたうときも（ささがにのいやしきたうときも）
「ささがに」は蜘蛛の異名。「ささがにの」は、蜘蛛にかかる枕詞と
して用いられるが、ここでは「蜘蛛の巣（い）」の意をもたせつつ、
「い」で始まる語「いやしき」にかかる。○はるのたのすくもすか
ぬも「春の田」は、「わすらるる時しなれば春の田を返す返すぞ
人はこひしき」（拾遺集・恋三・八一・つらゆき・延喜十五年御
屏風歌）に見えるように、「返す（返す）」というのが普通である。

「すく」は「鋤く」（農具で土を耕して細かにする）で、そこから「好く」（風流に身を打ち込む）を導く。「すくもすかぬも」の語句は、「……くもになくつるも、つひにむなしく、みぞにはふむしも、心のゆくへはへだてなしとおもひなせば、なにはなるあしきもよきもおなじ事、すくもすかぬもことならず、……」（好忠百首・序文）に見える。○いひせては「言ひ責む」は、厳しく問いただす、詰問するの意。○おなしみやまの（おなじみやまの）「同じ身」（同じ身の上）を言い掛けて「御山の」と続く。「白雲のおりゐる方や時雨らんおなじみ山のふもとながらに」（新千載集・雑上・一八〇四・太皇太后宮〈穩子。朱雀院母〉・御返し）、「世の中を おもへばくるし わするれば えもわすられず たれもみな おなじみ山の 松がえと かるる事なく すべらぎの ちよもやちよもつかへんと たかきたのみを ……」(拾遺集・雑下・五七二・よしのぶ・返し)。○くもかすみとのほりぬるをや（くもかすみとのほりぬるをや） 死んで火葬の煙となることをいう。「雲霞となる」に同じ。「をや」は、文末に用いて強い感動を表す。○あるふんやわらはあさな聖寂といふ人（ふんやわらはあさな聖寂といふ人）「ふんや（文屋）」は、「ふみや」の転。学問をする所、学校の類で、ここでは特に「大学寮」を指す。そのの学生を「文屋童」という（『江次第抄』）。「聖寂」は、源順を指すか。順は、天曆七（九五四）

年十月に文章生に補されている（『三十六人歌仙伝』）。詳しくは「考察」参照。○おなし心に（おなじ心に）この「心」とは、趣、趣向の意。「春」「夏」……といった百首歌の構成を指す。○おほみかきのゑししづのをたまき（おほみかきのゑししづのをたまき）「ゑじ（衛士）」は、令制で諸国軍団から交替で上京し、衛門府・左右衛士府に配属され、宮門の警護や行幸の供奉など、宮城の警護・雑役に従事した兵士。すると「おほみかき（大御垣）」は宮中の主要な門を指すのであろうが、未詳。「みかきもりゑじのたくひのよるはもえひるはきえつつものをこそおもへ」（詞花集・恋上・二二一五・大中臣能宣朝臣・題不知）、「君がもるゑじのたくひのひるはたえよるはもえつつ物をこそ思へ」（古今六帖・第一・七八一・火）、「みかきもるゑじのたくひにあらねどもわれもこころのうちこそおもへ」（和漢朗詠集・五二六・禁中）。また、「しづのをだまき（倭文の苧環）」は、倭文（梶・麻などの経を青・赤などに染めて、乱れ縞模様織り出した布）を織るための糸を巻いたもの。「いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりは有りしものなり」（古今集・雑上・八八八・よみ人しらず・題しらず）。「俊の男」を掛ける。ともに、本来、無感動なものとして並記される。○ある山ぶふしこけの衣に身をやつし、松のもとにおいをおくる心（ある山ぶしこけの衣に身をやつし、松のもとにおいをおくる心）「ある山ぶ

し」は、惠慶自身を臍化した表現。「吾の衣」は、仏道に入る人が樹下石上に座して修行するうちに、着物も吾のように古くなることから、僧侶や隠者などの衣をいう。松は長寿を暗示するか。「これがなかに、松のもとにこけのころもにやつれたる山ぶしあり」(『惠慶集』一六七番詞書)。○うち山の喜撰(うち山の喜撰) 喜撰は、宇治山に住んでいた法師。伝未詳ながら、六歌仙の一人に数えられ、『古今集』仮名序に「宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして始め終りたしかならず。いはば秋の月を見るに暁の雲にあへるがごとし」と評される。倭歌作式(喜撰式)の撰者に擬されている。「はなの山のちりにもつがず、うちやまのかぜにもあふがぬ身なれど」(『惠慶集』一六七番詞書)。○かたの、沙弥といふ山ふし(みかたの沙弥といふ山ぶし) 未詳。前田家旧蔵本文「みかたのさみ」に従えば、『拾遺抄』一四九番左注にもその名が見える万葉歌人、「三方の沙弥」であろう。○かゝるすちの事(かかるとすちの事) このような方面のこと。和歌を詠むこと。○ことこのむ 「こと」は、ここでは風流なことの意で、和歌を詠むことをさす。「法しの事このむが、うたのかへしを心おそくすれば」(重之集・一九三三)。○みやま木こつたふさるに、(みやま木こつたふさるに) 「みやま木」は深山木。ひっそりと人目につかない場所を暗示する。「こづたふ(木伝)」は、木から木へ移り伝わる意だが、ここでは、「うち

山の喜撰、みかたの沙弥といふ山ぶし」という歌僧の系譜を伝えるという含意がある。惠慶の頃までは、和歌において「こづたふ」といえば、鶯が一般的である。「こづたふさる」の和歌の用例は、「さらぬだにねざめの床のさびしきにこづたふ猿のこゑ聞ゆなり」(散木奇歌集・一三二三・よふけてむかひの山にさるのなきけるをききてよめる)とあるように、院政期の源俊賴「散木奇歌集」にまで下る。本序文の「さる(猿)」は、「あなみにくさかしらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似る」(万葉集・卷三・三四四・三四七)に見えるような、嘲笑・愚弄の対象であり、惠慶自身の卑下表現と見た。これは、先の俊賴歌とは対照的な「猿」の捉え方であり、「わびしらにましらなきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ」(古今集・雑体・一〇六七・みつね・法皇にし河におはしましたりける日、さる山のかひにさげぶといふことを題にてよませたまうける)という、猿の鳴き声を哀切なものとする、「古今集」以来の伝統とは一線を画す(和歌史における「猿」歌の変遷)については、川村晃生氏『「獣歌」考』(『王朝和歌と史的展開』笠間書院、一九九七年二月)を参照されたい)。以下、「二の舞」をかしきこと」「みん人わらひもしてんかし」と続くが、これら一連の表現はすべて、惠慶の百首歌詠作を、「猿楽」(即興の滑稽な物まね芸)と捉えた上での修辭である。○にのみまひ 「二の舞」で、本来は、

舞楽の曲名。安摩（あま）の舞の後、それを見ていた二人の舞人が、

という。

滑稽な所作でまねて舞うもの。転じて、人のあとに出てその真似を

【考察】

すること。ここでは、惠慶の本百首歌が、好忠・聖寂の百首歌の後

〈惠慶百首〉の序文は、整然とした構成をもつ。

を受けて作られたことをいう。○をかしきことにはあらねど、みん

まず、「これは、よの中に……も、ちの哥のかへし」という最初の一文で、以下の百首歌が、〈好忠百首〉に対する返歌であることが明記する。冷泉家本には、文末に合点らしきものが付されており、また、その内容からも、これ以下の序文とは一線を画すと思われる。あるいは、〈惠慶百首〉序文冒頭に書き込まれた注記が、本文化したもののか。

人わらひもしてんかし（をかしきことにはあらねど、みん人わらひもしてんかし）『好忠集』所収〈順百首〉序文冒頭で、先行する

〈好忠百首〉を指していった「このごろ、をかしきことあむなり」

を念頭に置いた表現か。〈好忠百首〉が「をかしき（風流な）こと」であるのに対して、〈惠慶百首〉は、「をかしき（風流な）」ものではないけれど、「をかしき（滑稽な）」ものとして、読む人はきつと笑いもするだろうよ、の意。「てん」は、「て」（完了の助動詞「つ」の未然形）に「ん」（推量の助動詞「む」）が付いたもので、当然のこととして、推量の意を強調して表す。きつと……だろう。また

「かし」は、確認のために念を押す気持ちを表す終助詞。このように、自らの不才を恥じる謙讓表現を序文末尾に置くのは、平安朝詩序の構成に倣ったためであろう。木戸裕子氏「平安詩序の形式——

〈惠慶百首〉に先行する〈好忠百首〉についての言及である。「あはれに」思ったことを「いひあつめ」たところ、和歌の情趣を解さなかつた「みみなしの山のききしらぬみみにも」「あはれ」を感じさせたという。「うぐひすききすぐしがたきあした」「なくしかあはれなるゆふぐれ」「ほととぎすこゑするなつものよ」「まさきのかづら色づきわたる冬のはじめ」という部分は、〈好忠百首〉中の歌の表現というよりはむしろ、「きのふまでさえし山みづぬるればうぐひすのねぞしたまたれける」（惠慶百首・三）、「あきのよのねぞめがちなるやまざとはまくらつどへにしかのみぞなく」（惠慶百首・二

自謙句の確立を中心として——」（『語文研究』第六十九号、平成二年六月）によれば、序文末尾の「自謙句」は、貞観・延喜期では同

時期の詩序全体の二十五パーセントに見られる程度だが、承平・天

暦期には、四十五篇のうち二十八編（六十パーセント）に急増する

序の構成に倣ったためであろう。木戸裕子氏「平安詩序の形式——

自謙句の確立を中心として——」（『語文研究』第六十九号、平成二年六月）によれば、序文末尾の「自謙句」は、貞観・延喜期では同

時期の詩序全体の二十五パーセントに見られる程度だが、承平・天

暦期には、四十五篇のうち二十八編（六十パーセント）に急増する

序の構成に倣ったためであろう。木戸裕子氏「平安詩序の形式——

自謙句の確立を中心として——」（『語文研究』第六十九号、平成二年六月）によれば、序文末尾の「自謙句」は、貞観・延喜期では同

時期の詩序全体の二十五パーセントに見られる程度だが、承平・天

暦期には、四十五篇のうち二十八編（六十パーセント）に急増する

九)、「我ひくやうひねはなくとほととぎすみどりこやまにいらてこそきけ」(恵慶百首・一二)、「あられふる冬はきにけりまさきづら色のありはもけさはことなり」(恵慶百首・三二)といった歌を念頭に置いているようである。意図的に呼応させたか否かはともかく、序文が書かれた時点で、これらの〈恵慶百首〉歌がすでに詠まれていた可能性は高い。

続く「あはれ、よの中は、……あはれにおもはせたりける」では、「聖寂」の百首歌について言及される。世の中の人はみな、「おなじみやまのくもかすみとのほ」という無常観を背景に、〈好忠百首〉の題の構成に倣って百首歌にまとめたところ、「おほみかきのゑじしづのをだまきまで」「あはれにおもはせ」という内容である。先の〈好忠百首〉に関する部分よりも短い文章だが、心に響いたことを歌に詠み、百首にまとめたところ、すべての人々を感動させたという文脈は、そっくり踏襲されている。

そして最後は、〈恵慶百首〉そのものについて述べられる。もっとも、「これを又ある山ぶし……わらひもしてんかし」というこの記述の中には、「恵慶」の名は見えず、「ある山ぶし」の百首ということになっている。『恵慶集』中には、恵慶本人を「山ぶし」と称することがあり、ここも同様の姿勢が看取される。「物のあはれわすれがたく」「よの中のはかなきありさま」を、「いひあつめたる事

ども」が、この〈恵慶百首〉であるところまでは、好忠や聖寂の百首歌についての言及を、やはり踏まえている。

ただし、先行する百首歌が、情趣を解さない人々をも「あはれ」と思わせたのに対し、この〈恵慶百首〉は、好忠・聖寂の「にのみひ」であり、「をかしきことにはあらねど、みん人わらひもしてんかし」と締め括る。この滑稽な行爲をする法師の姿から想起されるのは、「いまはときしらぬをはりほふしのすみぞめにやなしてましとぞおもふなり」という〈順百首〉序文最末尾の文言である。「をばかしらつつめるかみのみやきく」(能宣集・三三四)の他、『うつほ物語』国譲上にも、「尾張法師のやうなる悦びに侍れど」と見える、「時・所・場合をわかきまえぬ滑稽なふるまいをした者であったらしい」(三角洋一「散佚物語研究の現在」(『国語と国文学』第五十七卷第十一号、昭和五十五年十一月)九八頁)という。順は、そのような「尾張法師」を引き合いに出して、今はもう出家してしまいたいと述べる。すると、出家者である恵慶は、この〈順百首〉序文を受けて、〈恵慶百首〉序文において、人々の「わらひ」の対象となる百首歌を詠んだ「山ぶし」を、自ら演じたのかもしれない。

〈恵慶百首〉序文には、他にも、〈順百首〉序文の記述を受けて書かれたと思われる箇所が存する。「語釈」でも指摘したように、〈恵

慶百首」を指して「をかしきことにはあらねど」と述べた〈惠慶百首〉序文の一節が、〈順百首〉序文冒頭で〈好忠百首〉を「をかしきこと」と評しているのを受けた表現ではないかと考えられるのである。やはり、〈惠慶百首〉序文の執筆時には、〈順百首〉序文が念頭にあったと考えるのが自然であろう。そうすると、〈順百首〉そのものの成立も、〈惠慶百首〉に先行すると見て、まず大過あるまい。そして、松本真奈美氏が「惠慶百首について——好忠百首・順百首との関連——」（『尚絅学院大学紀要』第五一集、平成一七年一月）において指摘されるように、歌の内容や表現から見ても、〈惠慶百首〉は、〈好忠百首〉よりもむしろ〈順百首〉に添った作りになっているのである。

このように考えてくると、〈惠慶百首〉序文において、〈好忠百首〉と〈惠慶百首〉との間に位置づけられている百首歌を詠んだという「聖寂」について、いささか大胆な人物想定を行ってみたくなる。従来、たとえば、『和歌大辞典』『百首歌』の項（樋口芳麻呂氏）においても、「聖寂」の百首歌は「散佚」とされてきた。出自未詳の「聖寂」に、現存する初期百首歌の作者をあえてあてはめてみるといったことは、なされなかつたわけである。だが当時、百首歌を作ることのできた無名歌人が、そういったとは考えにくい。また、〈惠慶百首〉序文が書かれる時、すでに成立していたと推定される

〈順百首〉について、〈惠慶百首〉序文が一言も触れないというのは、まずあり得ないように思われる。

「あるふんやわらは」という、人物を醜化した表現が、文章生出身の、当代を代表する歌人、源順その人を指すとすると、未だ出自不明の「聖寂」という字——前田家本では空白になっている——も、河原院に集う仲間内でのみ通用した呼称であった可能性が浮かび上がってこよう。好忠・順・惠慶の百首歌は、成立当初、このような比較的狭い交友圏内で享受されたのではないだろうか。

附記

本試注は、筑紫平安文学会で行っている『惠慶法師集』輪説の成果の一部である。用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver. 2とともに、竹田正幸作成の文字列解析器「eCSA」Ver. 104を使用した。

なお、校正の段階で、川村兎生氏・松本真奈美氏『惠慶集注釈』（貴重本刊行会、二〇〇六年十一月）に接した。御参看いただきたい。

FUKUDA Tomoko（本学文化情報学部専任講師）

IMAI Akira（福岡女子大学文学部国文学科教授）

KUROKI Kaori（活水女子大学文学部現代日本文学学科助教）

TASAKA Kenji（福岡女子大学文学部国文学科教授）

TAKEDA Masayuki（九州大学大学院システム情報科学研究院教授）

NANKI Ichiro（純真女子短期大学現代コミュニケーション学科助教）

NISHIHARA Kazuo（福岡県立福岡中央高等学校教諭）